

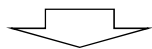
「美の滋賀」の新展開（骨子案）

1. 「美の滋賀」の理念（懇話会提言（平成24年2月）より）

（社会的背景）

（3.11 東日本大震災を契機）

経済成長に偏重し、地域のつながりや絆をないがしろにしてきたことの反省



「暮らしの中で本当に大切にしなければならぬものは何か」を「美」を通じて問い直しができる滋賀

（県を取り巻く状況、課題）

- 仏教文化に代表される長い文化の蓄積
- 県民が滋賀の美の良さに気づいていない
- 滋賀県のイメージが希薄、優れた資源の魅力が県のブランド向上につながっていない。
- 近代美術館の展覧会の観覧者が減少傾向、施設の老朽化、狭あい化
- 琵琶湖文化館の休館、地域で保存管理が困難なケースが増加
- アール・ブリュットの評価・関心の高まり



滋賀らしい「美」の発信のあり方 （滋賀モデルの7つの視点）

- ① 滋賀の美を新たな共通性や関係性を持って発信する。
- ② 人びとや地域が親しみ、支え合ってきた美で人をつなぎ、美を守る。
- ③ 地域的美を見てもらいながら守っていく。
- ④ 施設に陳列した美を見せるだけでなく、創造活動の現場や暮らしの場とつながり、そうした現場と交流しながら受発信を行う。
- ⑤ 滋賀の美への敷居を低くする。しかし、質は落とさない。
- ⑥ 県民参加で取り組む中で県民自身に発見し理解してもらいながら、県民総ぐるみで滋賀の美の魅力を伝えていく。
- ⑦ 美を通じた人と地域、社会の活動

第一弾として
3つの美の編みなおし

滋賀をみんなの美術館に

（目指す方向性）

人間の本质や人びとの
つながりを取り戻す

地域そのものを次世代
へつなげる

県民生活の満足度向上

経済の振興、地域の活
性化

<新たな視点>

①新型コロナウイルス感染症による変化

- 展覧会やアートイベントの鑑賞機会の減少等により、心の拠り所として文化芸術や美への希求・渴望が高まっている。
- テレワーク等の浸透により、地方への分散の流れが加速する中、地域の自然や文化の魅力・価値を再評価する動きが見られる。
- 地域の祭りや伝統行事の中には、コロナ禍による開催中止で、存続が危ぶまれるものもある。
- 県内の美術館・博物館では、休館により集客や経営への影響が懸念される。また、これまでのように他館と作品をやり取りすることが難しくなり、より地域の資源に目を向ける動きや、多様な発信の取組が広がることが予想される。

「多様な滋賀の美」の価値・魅力を再認識し、広く発信する好機と捉え、関係者との連携のもと、取組を展開

②県基本構想の推進、SDGsの達成への貢献

- 県民が、滋賀の美の魅力に気づき、触れ、ともに発信する中で、喜びや幸せを感じ、こころの健康にも資するよう、「美」の視点から「新しい幸せ」を追求していく。
- 美の発信を通じて、地域の資源を守り、地域そのものを次世代へつなげることで、滋賀の持続可能性を高める。また、全体の取組を通して、自然や文化資源の保護・活用、文化芸術活動の活性化、観光振興など、幅広い視点からSDGs達成への貢献を目指す。



課題や目指す方向性、滋賀らしい「美」の発信のあり方は、現状においても変わっておらず、引き続き、ベースの考えとなりうるもの

滋賀モデルの7つの視点を継承しつつ、美の滋賀で目指してきた「**滋賀をみんなの美術館に**」という大きなコンセプトの具現化に向けて、より幅広い視点から、**滋賀の多様な美の魅力を全体として発信していく。**

2. 滋賀の美の価値の再認識・発信

滋賀には、原風景ともいべき琵琶湖や自然美、自然と共生する文化の中で大切に守り伝えられてきた文化財や暮らしの美意識、伝統工芸といった日常の美、さらには、県内の作家や福祉施設から新たに生まれる創作、そして、美術館やホールで触れられる先端的な芸術など、過去から現在まで連なる「多様な美の資源」があふれている。

新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、画一化・都市一極集中から、多様化・地方重視へと人々の価値観が変化しつつある中、改めて、滋賀の美の価値を再認識し、県民や関係者とともに、守り育みながらその魅力をより高め、発信につなげていくことにより、「滋賀をみんなの美術館に」の実現に向けて取り組む。

琵琶湖・自然・景観



棚田



ヨシ



湖岸景観



街並

舞台芸術



びわ湖ホール



伝統工芸

滋賀の多様な
美の資源

くらし・生活文化



行事・祭り



ヴォーリズ建築



穴太衆積み石垣

文化財



彦根城



琵琶湖疏水

アートイベント



BIWAKOビエンナーレ

アール・ブリュット



近代・現代美術



神と仏の美



「美の魅力にあふれる 滋賀をみんなの美術館に」の実現に向けて

交流や発信の場づくり

ネットワークを活かした
多面的な発信

美術館改革

琵琶湖文化館の
リスタート

3. 施策展開の4つの柱

交流や発信の場づくり

(1) プラットフォーム の設置

■再開館後の近代美術館に、取組全体を統括し、一体的に推進する総合センターとして、プラットフォームを設置



近代美術館

美やアートを通じた交流や発信の拠点

滋賀の美の魅力を国内外に発信

新たな文化的価値の創造

企画・広報

- ・ 美の魅力発信に関する企画
(例) 美を巡るツアー企画(企画展との連動)
地域連携アート・プロジェクト
- ・ 美の資源や活動に関する一体的な情報発信

応援団づくり

- ・ 関係者のネットワークづくり
- ・ 参加の輪を広げるための美術関係団体や大学等と連携した取組
- ・ アート・サポーター(ボランティア)の育成

活動支援

- ・ 自主的に活動する地域・団体等の取組支援
- ・ 将来を担う県内の若手作家の支援、紹介
- ・ アール・ブリュットに係る連携促進、情報発信
- ・ 活動の場となる「(仮称)アートのひろば」の運営

相談・コーディネート

- ・ 美の取組や美術館との連携に関する相談窓口
- ・ 活動の主体とアート・サポーターのマッチング
- ・ 学校現場と美術館との協力・連携

(2) 出会い、つながり、発信の場・機会の創出((仮称)アートのひろば)

■文化ゾーン(美術館、図書館、広場等)をフィールドに、アート等に関するイベント・ワークショップを毎月開催(月2~3回程度を想定)

※これまで年1回1カ所で開催してきた『美の糸口ーアートにどぼん』の発展形として、作家や団体等との連携のもと定期的に開催

※公園の指定管理者、図書館、埋蔵文化財センターが実施するイベント等とも連携し、全体として集客、賑わい創出を図る。(年数回、合同イベントも開催)



アートを通じた出会い・交流

公園全体の賑わい創出

美術館等の公園内施設への来館促進

将来的には、美術館内にあるギャラリーの充実を図ることや、北側にエントランスを設けることも検討

県民や作家の発表機会の拡大

さらなる公園全体の活性化

ネットワークを活かした多面的な発信

(1) 県立施設間の連携

■各施設の特徴を活かした発信(美の視点)

近代美術館	近代・現代美術、アール・ブリュット
琵琶湖文化館	文化財(神と仏の美を中心とする美術工芸品)
陶芸の森	現代陶芸、滋賀の陶磁文化
びわ湖ホール	舞台芸術(自主制作オペラなど)
文化産業交流会館	舞台芸術(古典芸能など)
琵琶湖博物館	琵琶湖・自然・暮らし・生活文化
安土城考古博物館	文化財(史跡など)
埋蔵文化財センター	文化財(出土文化財など)

■県立施設間の連携

- ・ 美の魅力の統一的な発信
- ・ 共同での広報・PR
- ・ 他館への誘いの仕掛け
- ・ 企画展やワークショップの共同企画、リレー開催等の検討 等

(2) 公立・私立の枠を超えた県内美術系ミュージアム等の連携

■美術系ミュージアム等6施設※を中心に会議体を設置

※ 近代美術館、琵琶湖文化館、陶芸の森、MIHO MUSEUM、佐川美術館、
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

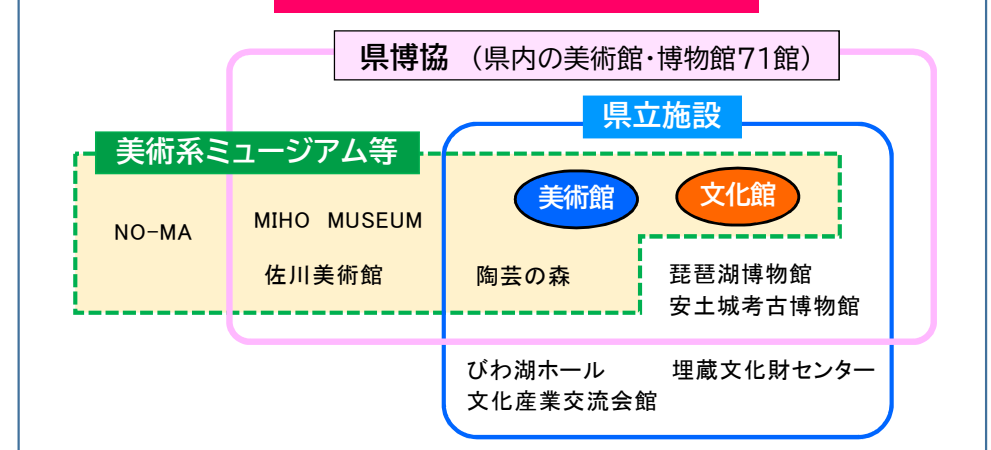
- ・ 共同での広報・誘客、ワークショップ等プログラムの交換、展示等の事業の連携開催や協力、共通課題についての検討や協力 等

(3) 滋賀県博物館協議会(県博協)等との連携

■加盟館の発信力強化、地域・団体との連携強化に向けた取組支援

- ・ 近代美術館等における美の発信の取組や地域との連携事例をモデルケースとして示しながら、協力・支援を行い、美の発信の輪を県内に広げる。

重層的なネットワーク



(4) 中核を担う美術館と文化館の発信・連携

(近代美術館)

- ・ コレクションである近代・現代美術や郷土ゆかりの作品を通して、作品の魅力だけでなく、歴史や文化的背景、地域とのつながり等についてもわかりやすく伝え、鑑賞した人が現地へ思いを馳せ、実際に足を運びたいような展示を行うことで、滋賀の美の魅力の発信につなげる。
- ・ 世界的に評価が高まってきているアール・ブリュット作品について、滋賀の地における歴史的な位置づけも踏まえながら、その魅力を国内外に発信し、公立美術館として、作品を後世に引き継ぐ。
- ・ コレクションの枠を超えたイノベーション的発想により、アートの視点から、自然美や建築、舞台芸術など滋賀の多様な美の魅力に迫る。

((仮称)新・琵琶湖文化館)

- ・ 多くの人を惹きつける神と仏の美をはじめとする近江の文化財の魅力を、その歴史や風土も含めて広く紹介し、関係する寺社やゆかりの地への誘いにもつながら、滋賀の奥深い魅力を発信する。

(両館の連携)

- ・ 企画展示や教育普及事業などにおいて滋賀の特徴的な「3つの美」を一体的に表現するなど、多様な連携を図る。

美術館改革

(1) 再開館に向けて

～ みんなにやさしい快適な美術館へ ～

■従来の施設イメージを刷新し、居心地のよい空間へ

- ① ウェルカムゾーンの整備
(空間デザインの導入、ロビー内にカフェ・ショップ、情報コーナー配置)
- ② 利用者サービスの向上
(案内表示のユニバーサルデザイン化、トイレの全面改修 等)
- ③ 親子連れで利用しやすい環境整備
(キッズスペース、授乳室、ファミリートイレの新設)
- ④ 作品鑑賞環境の改善(展示室内装改修、LED照明の導入 等)
- ⑤ ミニギャラリーの整備(県内作家が展示や販売を行うスペース)

■館名の検討

滋賀県立近代美術館という館名について、
新たな展開を踏まえて、ふさわしい名称を検討

■VI (ビジュアル・アイデンティティ) デザインの導入

生まれ変わる美術館をイメージしたVIデザインの導入

■ウェブサイトの全面リニューアル

- ① ユーザーとの積極的なコミュニケーション
- ② 子ども向けコンテンツの充実
- ③ オンライン美術館サイト(バーチャル展示室)の構築



(2) 再開館後の展開 ～これまでの近代美術館の枠を超えた事業展開～

■展覧会改革

- ① 特色あるコレクションの活用
(客観的な価値の把握 → 価値を高める努力
→ 作品の価値・意味・背景をわかりやすく伝える展示)
- ② 新たな魅力に出会えるオンリーワンの自主企画、
テーマ性のあるコレクション展示
- ③ 従来のコレクションの枠にとらわれず、地域の文化に対する幅広い視野を持つ
 - ▶ 伝統文化への視点(陶芸、民具 等)
 - ▶ 創造現場の現場との積極的な交流(若手作家、福祉施設 等)
 - ▶ 美術と交差するジャンルへの関心(舞台芸術、写真 等)
 - ▶ 教育普及プログラムと連動した体験型展示
 - ▶ ウェルカムゾーンと庭園を活用した機動的な作品展示

<企画案(例)>

地域ゆかりの美の再発見
郷土作家の回顧展
現代美術コレクションを活用した企画展
アール・ブリュット調査研究の成果展
琵琶湖文化館の収蔵品による企画展

<企画案(例)>

伝統文化や暮らしの美に光をあてる企画展
地域ゆかりの若手作家によるグループ展
造形・鑑賞プログラムと連動した企画展
県出身作家の個展

■アート体験の多様化

- ① 様々なニーズに応じたきめ細かな教育普及プログラム、学びの提供
(子どもの年齢段階に応じた鑑賞教育や創作体験のプログラムの提供 等)
- ② 公園全体の活性化につながるアートイベントの企画・実施
- ③ 教育現場と連携し、学校の団体鑑賞の受け入れや出張プログラムを実施

■経営の健全化(来館者増、収入増)

■公園内施設との有機的 連携、美術館に至るまで のワクワク感の演出

(3) さらに施設機能の向上に向けて

以下の課題や再開館後の状況も踏まえながら、さらなる機能向上に向けて検討を進める。

(課題)

■収蔵庫の収容力向上

- ・ 狭隘化が進む収蔵庫について、さらなるコレクションの増加も見込まれることから、将来的な拡張について検討する。

■ギャラリーの充実

- ・ 県民や作家、団体の発表機会の拡大、美を通じた交流や公園の賑わい創出の観点から、ギャラリーの充実について検討する。

■北側エントランスの整備

- ・ 美術館へのアプローチが便利になるよう、池側にエントランスを設けることを検討する。

■施設の長寿命化

- ・ 現施設を長期的に有効活用するため、「長期保全計画」に基づき、施設の予防保全に計画的に取り組む。

<参考> 近代美術館のリニューアル

① 作品の魅力をより楽しめる

- 各展示室内装(天井・床・壁面)の張替
- 作品を守り演出効果の高いLED照明の導入
- 快適な鑑賞のための壁面ガラスケースの低反射施工
- ギャラリーの展示壁クロス張替とスポットライト導入

多様なテーマ
やジャンルの
美術表現に
対応できる
企画展示室



主に現代美術
の展示を行う
常設展示室2



主に日本画や
工芸などの
展示を行う
常設展示室1



屋外に椅子やテーブルを配置し
公園利用者を館内に誘う
エントランス前



カフェやショップ、情報コーナーが
配置される エントランスロビー

② 人と作品の安全を守る

- 万一の場合も作品を守るガス消火設備を各展示室に導入
- エントランス・ロビー天井の耐震化
- 老朽化した空調機器の更新
- 防火シャッターの改修
- セキュリティ向上のための扉新設や電子錠設置

③ みんなにやさしく使いやすい

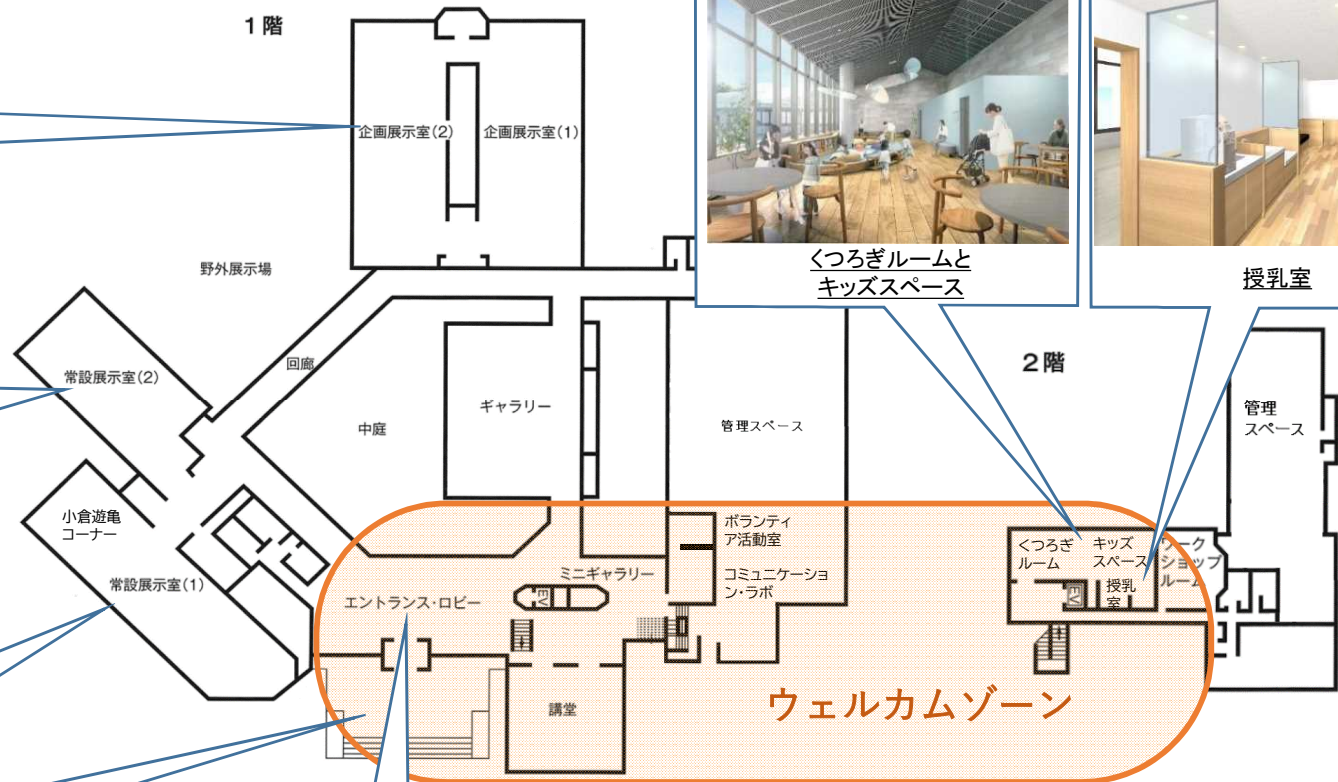
- 授乳室や親子で使えるファミリートイレの新設
- 各トイレの全面改修(洋式化)
- 誰もがわかりやすい案内表示に更新



くつろぎルームと
キッズスペース



授乳室



④ 賑わいのある美術館へ

エントランス・ロビーおよびその周辺を、美術館と来館者の出会いや交流の場となる「ウェルカムゾーン」と位置づけ、統一的なコンセプトでデザインされた空間として整備する。多くの利用者が美術館で過ごす時間を楽しみ、居心地の良さを感じてまた来たいと思っていただけのを目指す。

- ロビー内に美術や滋賀に関連した商品・情報を提供するカフェやショップ、情報コーナーを設置
- 小規模なイベントや展示に活用できる多目的スペース(コミュニケーション・ラボ)やボランティア活動室の新設
- 滋賀県産の素材を活用したテーブルやベンチ等を館内とエントランス前や中庭など屋外にも配置
- 親子連れで利用いただきやすくなるよう、キッズスペースや授乳室、ファミリートイレ等を新設
- 県内作家が小規模な展示や販売を行うことができるミニギャラリーを整備

琵琶湖文化館のリスタート

■現状と課題

世界・日本

- ・文化財保護法改正、文化観光推進法成立
- ・先端技術等による文化財の活用可能性
- ・コロナ後の社会を見据えた課題

滋賀・地域

- ・文化財保存活用大綱の策定
- ・県内における人口減少・過疎化の進行
- ・日本遺産の認定

琵琶湖文化館

- ・多数の国宝・重要文化財を含む収蔵品
- ・平成20年度以降休館中。十分な活用ができず、新たな寄託にも応じられない状況

(仮称)新・琵琶湖文化館

■基本理念

(仮) 近江の文化財で “つなぐ” “ひらく” 未来の滋賀

悠久の時間の中で育み受け継がれてきた「近江の文化財」により
さまざまなつながりを創出

「近江の文化財」

つなぐ① 「人と地域」

つなぐ② 「歴史と未来」

つなぐ③ 「滋賀と世界」

■施設像

近江の文化財を保存・継承・活用・発信
する中核拠点

近江の文化財を
中心とする
ミュージアム

地域の文化財の
サポートセンター

地域・社寺、
県内博物館

文化観光の拠点
ビジターセンター

県内文化
観光施設

■活動の基本方針

活動の5本の柱

- ① 収蔵・保管
- ② 展示
- ③ 調査・研究
- ④ 情報発信・交流
- ⑤ 地域の文化財の保存・活用支援



活動の3つの視点

- ① 県内歴史文化系博物館の核となる役割
- ② 誰もが利用しやすい工夫
- ③ コロナ後の社会を見据えた博物館